

## 能登半島の地元団体と協働した被災者支援

ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループ

JAPAN COMMUNITY IMPACT 能登半島復興支援チーム 社員ボランティアの皆様

【パートナー団体：公益社団法人ピースボート災害支援センター】

### ■活動の目的:

震災後 2 年目を迎え、人口流出が進む能登半島では、能登に残った被災者は困窮を極める一方、報道が極端に減り、東京を始めとした非被災地の人々の記憶から消えつつある。私たちは昨年(2024年)、地元の社会福祉協議会と連携して復旧活動を進めていたが、今年(2025年)は、複数のローカル NPO と連携し、被災者に寄り添った復興支援を行い、被災者の災害関連死や QOL 向上を目的とし、共感する社員を集め、会社としての志を具現化した。

### ■活動を始めたきっかけ(活動開始:2025 年 1 月):

2024 年に、羽咋市以南から金沢近郊での復旧活動に尽力する中、能登空港や多くの幹線道路が復興し、いよいよ激震地である奥能登への活動を本格化させる機運が高まった。一方、2025 年 1 月に輪島を訪れた際には、まだ公費解体が進まない現状を知り、愕然としたことが原動力となっている。そこで、社内で公式に有志ボランティアチームを新設し、輪島市出身の社員をリーダーに迎え、満を持して、奥能登での活動に全力で取り組んだ。

### ■活動内容(ボランティア実数:230 名、販売会購入者を合わせると約 1000 名):

2025 年 1 月から 10 月まで輪島・珠洲・能登町・七尾で被災者に寄り添い、ストレスケア・サロン・健康管理の支援など QOL 向上を目指す活動を継続。自前のボランティア申込サイト“Let's Apply”を通じて、活動の機会を全国の拠点に配信し、多くの社員を募った。

●NPO 法人ピースボート災害支援センターを通じて、初めて仮設住宅生活者と対話し、輪島市内全域の仮設住宅で、支援物資の配給やサロンの運営を実施。また、去年の豪雨時

以降に再度設置された避難所の撤収作業や、物資拠点の在庫管理・移設作業を定期的に行った。

直近 10 月には、支援物資を運ぶ『FOOBOUR(フーバー)』の物資を整理。フーバーとは、フードとハーバー(港)を掛け合わせた造語で、普段はひとり親家庭の支援として、災害時は避難物資として利用できる移動車のこと。フーバーを効率よく、また、効果的に運用するために、全国から集まった支援物資を一か所に集約し、種類別・期限別に数量を記録管理した。



●親子支援・災害看護支援を行う団体『てとめっと』を通じて、能登町の公民館にて地域の被災高齢者や子どもたちに対し、ぬいぐるみを用いたストレスケアプログラムの運営支援を実施。ぬいぐるみを抱擁すると幸せホルモンが分泌されることから、不安感や恐れが軽減され、人との関りを持ちたいと思うようになる。団体の代表からノウハウを学び、社員が実施できるようになった。危険度判定を受けなかった家屋で孤立生活をしている人たちには支援が届いていないことがわかってきたため、仮設住宅ではなく、在宅避難の住民を主な対象とした。

●民間災害ボランティアセンター『おらっ  
ちゃ七尾』が実施している復旧と復興の  
両面を支援した。2024年に奥能登の災  
害支援基地となっていた七尾は、意外に  
も奥能登以上に復旧が遅いことがわか  
った。同センターは旧保育園の施設を利  
用しているため、近隣の仮設住宅の子ど  
もやお年寄りをお招きして、模擬コンタ  
クトレンズづくり、ぬいぐるみワークショ  
ップ、組子コースターづくりなどのイベ  
ントを開催。



●2025年9月と10月の3連休に『ARROWS』と連携して、社員および外部の看護師を招き、珠洲市の被災宅での健康管理の支援や公民館でのサロンを開催。当社社員が看護師の研修を企画し、来年度の計画づくりを一緒になって考えるなどの伴走支援を行った。

●その他、輪島朝市の4商店を東京本社にお招きして販売会を実施し、現地に行かない社員も参画の機会を得ることができた。

#### ■活動の成果:

●当年度の被災地での活動日数は40日。

●社員参加者数は230名超。内訳はピースボートの支援43名、てとめっとの支援30名、おらっちゃ七尾の支援145名、ARROWSの災害看護支援など30名。

●支援した被災宅は100世帯超。

●輪島朝市の4商店(干物店・輪島塗の陶器・アクセサリー・塩石鱈)をお招きし、本社2,000人の社員に販売会を実施。73万円の売り上げ。被災地に行けない社員の想いに応えた。

第11回企業ボランティア・アワード『大賞』